

## 台湾東部と沖縄先島諸島にみる越境現象 ～与那国町を中心に

上水流久彦\*

### 要旨

沖縄の与那国と台湾は戦前同じ国内に位置していた。戦後直後の混迷の時代には国境はあるが自由な移動が比較的可能であった。その後、国境は次第に強固なものとなった。近年、与那国では過疎化が進むなかで地域振興の方策として台湾との交流、交易が模索されている。その背景には過去の往來の経験がある。だが、その試みは国境がなかった時代の関係を国境がある現在で再現しようとする試みで、国民国家の枠組みを乗り越えようとするものである。そのため問題も多い。国外と国内を厳密に分け、国内の均質性を基礎とする国民国家は地域実情を無視せざるを得ない構造を根本的に有しており、その均質性の確保が地域の自立的発展を阻害している。

キーワード：トランスナショナリズム（越境）、与那国、台湾東部、国民国家  
地域振興、植民地支配

\* 県立広島大学地域連携中心助理教授

## 台湾東部と沖縄先島諸島にみる越境現象 ～与那国町を中心に

### はじめに

本稿の目的は与那国を主な事例として台湾東部と沖縄先島諸島（八重山古地域）との交流が進展しない原因を明らかにすることにある。先島諸島は清朝、大日本帝国、日本国あるいは中華民国、米国の統治を経験し、のあり方もそれに応じて変動し、関係も変化してきた。特に戦前、両地域と外地の違いはあれ、同じ国内に位置していた。「文化」は台湾から与那石垣を経由して沖縄にもたらされ、特に先島諸島の人々にとって台北は「な都会」であった。戦後直後の混迷の時代には、国境はあるものの自由な移動が比較的可能であった。その後、アメリカの統治下で中華民国、沖縄、本という境界ができ、その境界は国際関係のなかで次第に強固なものとなった。先島諸島では過疎化が進むなかで地域振興の方策として台湾との交流が模索されている。その背景には地理的近接性と往來の記憶から同一生像がある。だが、その試みは「国境がある」ことによって阻まれているといふ本稿では、先島諸島の視点から考察されてきた上記両地域の越境現象をこの視点からも捉え直し、「国境がある」と語られる要因を明らかにする。は同一システム経験の異質システムへの移植である。なお、本稿では最もしている台湾と与那国との関係に特に注目する<sup>1</sup>。

### 1. 越境（トランスナショナリズム）と八重山

近年、越境（トランスナショナリズム）が人文科学の領域では問題となっている。グローバリゼーションのもと人や技術、資本、モノなどが国境を越移動することが背景にある。技術や資本などの国境を越えた移動（例えば端医療の浸透など）においては、移入先の文化との交渉（文化変容等）が<sup>2</sup>となっている。人の移動を中心とした問題では、一過性の一方的な越

<sup>1</sup> 日本と台湾との間には時差が1時間あるが、日本植民地時代、与那国のみは台湾と同じであった。その距離は約110kmしか離れていない。

<sup>2</sup> 東アジアを対象としたものにWatson(1997)、Nakamura(2007)などがある。

はなく、「跨境」<sup>3</sup>、すなわち二つの地域を双方向的かつ頻繁に移動する越境が焦点となっている。移住、移動の要因は何なのか、越境する人々のアイデンティティとはどのようなもので、如何に形成されるのか、彼らのホスト社会への適応、逆にホスト社会の変容とはどのようなものが、さらに越境する人々の空間認識とはどのようなものか等が具体的な課題である。それらの研究は、ひとつの場に固定された社会研究の再考を促し、ひとつの場の基盤となる国民国家、ナショナリズムへの批判的考察を行うものである<sup>4</sup>。

本稿が取り上げる台湾東部と先島諸島の間も後述するように頻繁に人の移動が日本の植民地時代から繰り返された場所で、「跨境」する人々が多く存在した。台湾から働く場を求めて石垣や西表に渡った者、豚などを売るためにまたは日本本土に手紙を出すために対岸の台湾に漁船で乗り付けた与那国の人々、国境を跨いで密貿易に参入した人々、その中継地点として栄えた与那国、台湾人の観光客受け入れを進める石垣である。

また台湾東部と沖縄先島諸島は植民地支配のもと「国内」であった地域に国境線が入れられた地域である。近代的国境概念がなく移動していた社会に近代的国民国家の概念が導入された地域ではなく<sup>5</sup>、また近代的国民国家の国境の存在が当然視されてきた地域でもない。当該地域はほぼ100年の間にほとんど没交渉とされた地域が同じ帝国の領土となり、その後、別の国民国家体制に組み込まれた場所である。そのため同じ国内として移動した人々がいると同時に、国境の存在を当たり前とみなす世代も存在し、国境について異なったイメージを持つ人々が混在する地域である。管見する限り、このような地域を扱った研究はない。「国内」移動した人々から見ると、国境を前提した現在の空間認識やあり方は異質なものである。例えば、後述するように与那国や石垣では、「国内」であった記憶が両地域の交渉を突き動かす要因となっている。そして、その記憶が国境の存在を当然視する世代を突き動かし、現在にも影響している。

<sup>3</sup> 中国語では「境を跨ぐ」という「跨境」がトランスナショナリズムの訳語に当てられている。  
<sup>4</sup> 八重山に移住した人々のアイデンティティ、ホスト社会との関係、文化変容を問題とした研究に、小原(1989)、野入(2000、2001)、松田(2004)、岡(2008)らの研究がある。  
<sup>5</sup> 上水流と中村は、中華民国に自らのルーツを求め韓国に住む(住んでいた)人々である韓国群僑についてその点から論じた(上水流・中村 2007)。彼らの中には東アジアの政治的変化のなかで韓国、台湾、日本、アメリカ、中国の間をたびたび越境する者も少なくない。  
<sup>6</sup> このような地域の研究に床呂(1999)がある。

そこで以下では、当該地域の歴史をまず概観してみよう。

沖縄と台湾の関係に造詣の深い又吉は、台湾が日本の植民地になる以前、すなわち清朝時代、与那国を事例に先島諸島と台湾東部は異なる文化であり、没交渉であったと述べる(又吉 1990)。又吉は与那国に残る伝承や物語、馬淵の記述に基づいて、文化的共通性があるというよりはむしろ、与那国は台湾への拒否があったと分析する<sup>7</sup>。1871年には、宮古島の住民66人のうち54名が台湾東部の居住する牡丹社のパイワン族の先住民に殺害される事件が起こっている。

だが、琉球が大日本帝国に沖縄県として1879年に編入され<sup>8</sup>、台湾が1985年の下関条約によって日本に割譲され、両地域が同じ帝国の領土となるとその関係は大きく変化した。労働力が不足していた台湾では沖縄からの人々が台湾に移り住み、新天地を求めた。「台湾への人的供給源としての沖縄」である(又吉 1990)<sup>9</sup>。

先島諸島と台湾の関係も同様であった。台湾で働くために多くの人々が台湾に渡り、さらには進学先を求めて台北市へ移り住んだ。女性は、「内地人(日本本土から来た日本人)」の礼儀作法を身につけ、国語(日本語)を学ぶために台湾の内地人の家にお手伝いさんとして奉公した<sup>10</sup>。

就職、進学、奉公に加え、大けがをした時に担ぎ込まれる先が台湾であった。石垣在住のインフォーマントによれば、日本植民地期に落馬して骨折する大きなけがをしたのだが、その時に最終的に運ばれたのは、台北帝国大学の医学部に付設された病院であった。筆者が台湾なのですと不思議そうに尋ねると、「次に近い、帝国大学の病院は福岡にある九州帝国大学ですよ、遙かに遠いですよ。台北帝国大学の病院は沖縄本土の病院よりも質も高くて近いですから」と答えた。石垣と沖縄本島は約400km離れており、石垣と台湾との間は270km程度である。ましては九州は彼の言葉どおり遙か彼方である。

<sup>7</sup> ただし、八重山と台湾東部の民俗習慣を調査している黄智慧は、両者には類似する習慣があり、そこが同じ文化圏にあったのではないかと新たな説を展開し、環東台湾海文化圏と名付けている(黄 2000)。

<sup>8</sup> 最初は鹿児島県に編入され、その後沖縄県がもうけられた。

<sup>9</sup> 又吉は台湾に移り住んだ沖縄の人々が内地人と区別され、二等国民と差別された実態を指摘している。台湾人は三等国民とされた。

<sup>10</sup> 台湾人の裕福な家庭に奉公した女性も存在した。そのため台湾人口の多くを占める閩南語を身につけた者も存在したという。

与那国のインフォーマントによれば、植民地期、漁船で往来したという。与那国と台湾東部は約 110 km しか離れておらず、個人所有の漁船でも 4 時間ほどあれば、台湾に着くことができた。日本本土に郵便を出す場合も、与那国から沖縄本島で出すより、台湾経由で出すほうが早く着いたと語る<sup>11</sup>。そのため、漁船で漁に出る知人に郵便を頼んだのである。また、船に家で飼っていた豚を積んで台湾に売りに行くこともあった。売ったお金で日用品を買ってきた。このように単に移り住むだけでなく、日常の生活で台湾と先島諸島とを往来することは珍しくなかった。

上記とは逆に台湾の人々が先島諸島に移り住むこともあった。例えば、石垣に水牛を導入し、耕作労働の質を変えたのは台湾の人々である。また、石垣ではパイン産業が盛んでいるが、それは台湾人によってもたらされたものであった(松田 2004)。西表島には日本植民地期、炭坑が開発されるが、そこで台湾人も働いていた(三木 1996)<sup>12</sup>。台湾東部と先島諸島で双方向の人的流れがあった。

だが、このような関係は 1945 年の日本の敗戦、台湾の当時の中国政府への返還によって大きく変わる。与那国では台湾との合併論も真剣に論議されたが、最終的には台湾とは切り離された。終戦直後の先島諸島と台湾との関係において大きく注目されるものに密貿易がある<sup>13</sup>。密貿易を扱ったものとしては、例えば、石原(1982)、大浦(2002)、奥野(2005)らがある。これらの研究によれば、沖縄からはアメリカ駐留軍の横流し品(たばこ、缶詰、銃弾など)が日本本土や台湾に運ばれ、台湾からは砂糖などの日用品が運ばれた。

その密貿易の中継地点として栄えたのが与那国であった。現在、人口が 1,700 人にも満たない与那国であるが、当時はその 10 倍の 17,000 人ほどが住んでいたという。その人口をもって与那国は村から町になった。与那国の港町である久部良には密貿易従事者を相手にする旅館や飲み屋が軒を並べ、ドル紙幣、台湾紙幣、日本紙幣が飛び交っていた。その隆盛は、鶏でさえ落ちた米を食べな

<sup>11</sup> 当時就航していた船の能力、便数によって台湾からが早かった。

<sup>12</sup> 植民地期、日本本土の炭坑労働では朝鮮人や中国人労働者が注目されるが、台湾人も炭坑労働をしていた。だが、三木を除くと西表の炭坑における台湾人に関する研究は皆無であり、今後の研究が望まれる。

<sup>13</sup> 密貿易というネーミングに対して、そのように暗いイメージはなく、日本や沖縄の復興に寄与したことから、「復興貿易」と呼ぶべきだとする考え方が近年ある。

いと言われたほどであった。

与那国町の富の源泉となった密貿易は終戦直後から 1949 年にかけて盛んに行われた。だが、その後、アメリカ駐留軍の銃弾が台湾を経由して当時アメリカと対峙していた中国共産党軍に渡る出来事等があり、取り締まりが厳しくなる。琉球がアメリカ統治期に入る 1951 年には、密貿易はほとんど見られなくなる。

アメリカ統治期の密貿易では、個人がそれで潤うことがあっても、終戦直後のように地域全体が栄えることはなかった。その時期、台湾の人々はサトウキビ刈りを手伝うために与那国に来るようになった。だが、筆者の現地調査によれば与那国の住人と広く交流するというよりもむしろ、サトウキビ農場や工場との関係者とのごく限られた関係に過ぎなかった。

1972 年に沖縄は日本への復帰を果たすが、その後、自治体間の交流が中心となる。筆者自身は与那国で 1970 年代も密貿易を行っていた話を聞いたが、特殊なものに過ぎなかった。日本に復帰したため、サトウキビ農場や工場での労働のために台湾人が与那国に来ることもなくなった。台湾の漁船などが台風など天候の悪い時に、緊急避難的に与那国の漁港に停泊することはあっても、日本植民地期のように同じ漁場で漁を行い、台湾と八重山との間を往来することはなかった。国境は徐々に強固なものとなっていた。

復帰後、先島諸島において台湾の自治体と姉妹都市を結ぶのは、1982 年に花蓮市と締結した与那国町である。その詳細な経緯については不明な点もあるが、与那国の建設で必要となった砂利を台湾から運ぶことなどが関係していたという。与那国町と花蓮市は姉妹都市協定を結ぶものの、その交流事業は盛んなものではなかった。その次が石垣市と台湾東部の蘇澳鎮である。まず、1982 年に八重山青年会議所と蘇澳鎮青年商會が姉妹関係を結び、民間交流が開始された。台湾がアメリカや日本との国交断絶、国連からの脱退など、国際社会での孤立を深めるなか、他国との積極的に国際関係を結ぶことが政府をあげて奨励された。そのなかで蘇澳鎮は青年会議所の交流を通じて 1980 年代に石垣関係者と接触する機会があったことが契機であった。その関係が発展して姉妹都市の協定が、両者の間で 1992 年に締結された。

最近では、宮古島市と基隆市が姉妹都市協定を 2007 年に結んだ。宮古島市

と基隆市との間ではヨットレースがあり、それが縁で姉妹都市締結の話が進んだという。同年には牡丹社事件があった地を宮古島市長ら関係者が訪ね、「愛と平和 (愛と平和)」の石碑の除幕を行った。

現在、宮古空港、石垣空港、与那国空港では桃園国際空港や花蓮空港へのチャーター便が飛んでいる。また、台湾のクリアランス船の入港は石垣市にとって重要な税収源となっている。台湾から直接、中国本土へ行くことができない貨物船が現在も存在し、第三国を経由することが必要だからである。そのため台湾から近く、入管が整備されている石垣市を経由して中国本土に向かう船は少なくない。国境があるが故のメリットである。

ここまで見てきたように同じ帝国内にあった頃や直後は両地域の間で往来が盛んであった。また往来の頻繁さは、豊かさをその地にもたらした。だが、アメリカ統治期、特に復帰後は国境が強固なものとなり、その往来は不自由なものとなった。かつ、往来も自治体などを中心としたものに変容した。

現在、先島諸島から台湾東部へ行く場合、まず数百キロも離れた那覇に移動し、そこから台湾西北部にある桃園国際空港に向かい、さらに台北市に移動して、そこから列車等で台湾東部へ移動しなければならない。植民地期与那国では漁船に乗って4時間程度で台湾東部に移動できたが、船で直接往来した当時と違い、現在は時間も手間もかなりかかるようになった。

したがって、先島諸島のなかでも与那国において、直接、台湾東部と往来できないか、模索するようになったことも自然なことであった。次節では、その与那国の越境の試みについて論じる。

## 2. 現在の与那国からの越境の試み

与那国は沖縄本島からも400 kmあまり離れたところにある。日本本土の最南端からでも約1000 kmある。その地理的特性ゆえに、東京を中心に日本を考えた場合、与那国は周辺に位置することになる。その周辺性は与那国の生活を苦しいものにし、日本の周辺に位置する与那国という意識を与那国の住人も持たせていることも事実である。

与那国も日本の他の離島や中山間地域と同様に衰退は激しいものとなっている。まず過疎化である。現在の人口は1700人にも満たず、最盛期の10%余

りである。高齢化も激しく、2006年現在、高齢人口(約20%)が年少人口(約18%)よりも多い。

インフラ整備も進んでいない。現代社会において情報設備は重要なインフラであるが、光ケーブルは石垣までとされ、与那国に來ないこととなっている。そのため現在でも与那国のインターネットではADSLに頼るもので、重い映像などを送信することは難しい。

物価も高い。多くの日用品が日本本土や沖縄本島から運ばれるために、輸送コストが商品に加えられ、日本本土や沖縄本島に比べてかなり値段の高いものとなっている。例えば、ガソリンであるが、日本本土が1リットル当たり180円前後である頃、与那国では200円前後であった。与那国では牛が飼われているが、その飼料も本島や日本本土から運ぶため、ある畜産農家よればそのコストは大きな負担となっているという。

このように地理的に周辺に位置することは、物価高やインフラの不十分な整備、過疎化を招き、日本の周辺という自己認識を強めるものとなっている。この「周辺性」を打破するものが、台湾と日本を結ぶ国境にある中継地としての与那国であり、台湾との交流による与那国の発展である。

与那国町の関係者の言葉を借りれば、与那国は台湾にとって最も近い「日本」であり、そこに工場を建てれば、「made in Japan」が出来るというものであった。また与那国を最終目的としなくても、台湾から沖縄本島を観光する場合、台湾→与那国→石垣→沖縄本島→台湾(またその逆ルート)のように循環型の観光戦略をとることで、与那国を中継地として栄えるというものであった。狙いは台湾との交流(観光)・交易による活性化である。

その実現に向けて、与那国町は様々な試みを行ってきた。それらは4つにまとめられる。一つ目は小泉政権下の特色ある施策とされた特区構想である。与那国町は、2005年、2006年と続けて特区申請を行った。2006年の申請内容は以下のとおりである。

### 1. 国際防災協力特区

- ・国際防災協力の推進による広域的災害からの地域住民の人的な保護など、国境離島における防災体制の強化・構築
- ・国外の地方公共団体等との防災気象情報共有体制の構築

・海外支援助物資の迅速な受け入れ体制の構築

## II. 国境交流支援

・短国際航海安全航行促進特区

国境離島における短国際航海（与那国—花蓮間60海里）の安全航行促進

## III. 国境離島型開港（クリアランス船等受け入れ促進特区、期間限定トライアル開港）

・非検疫港状態にある与那国島でのクリアランス船等の入港促進措置国境離島の振興等に資する需要創出型トライアル開港

その主たる狙いは直接、与那国と台湾東部において往来することであり、それを可能とするシステムの導入である。二年とも特区指定にいたるものではなかったが<sup>14</sup>、二年目の審査結果では、特区に指定されなくても実現可能という判断が示された<sup>15</sup>。

二つ目は花蓮市への連絡事務所の設置である。連絡事務所は2007年5月29日に花蓮市役所内に置かれた<sup>16</sup>。与那国への高速船の就航やクリアランス船の入港促進、観光開発、チャーター便の就航の基盤作りなどの成果をあげた。三つ目はチャーター便の運航である。2007年10月是与那国から桃園国際空港へ、国際カジキ釣り大会にあわせて2008年7月には与那国・花蓮空港間のチャーター便が飛んだ。

これらの施策を進め、与那国を観光・物流・生産の拠点にし、台湾と日本の間の中間に位置する与那国の特性の活用をはかっている。周辺を逆手にとって、周辺からの脱却を与那国町は試みているのである。

このような与那国の取り組みの原動力は既述したように与那国町の社会的衰退である。だが、台湾との交流による振興というアイデアは、衰退という社会的要因ではなく、過去の交流の体験と記憶によるところが大きい。先述したように与那国の人々にとって植民地期台湾は進学先であり、就職先であり、奉

<sup>14</sup> 日本政府が直接往来と認めないというなら漁船で台湾に乗り着けるという強硬な意見も与那国町にはあった。

<sup>15</sup> これは与那国が台湾東部と直接交流をしても良いという国家からの承認とも解釈できる。

<sup>16</sup> 現在も事務所自体はあるが、駐在員は2007年11月最初に与那国に戻って以降は不在である。

公先であり、入院先であり、豚を売りに行くところでもあった。終戦直後は密貿易によって富をもたらしてくれる場所であった。与那国の人々にとって台湾は内地人より遅れた人々が住む、そして彼らに代わって統治すべき植民地ではなかった。台北は最も身近な大都会であった。

筆者の与那国のインフォーマントは当時の生活を懐かしがって、子ども向けの漫画も沖縄よりも早く読むことができたと言った。日本本土から漫画は来るのであるが、沖縄本島経由ではなく、台湾から漫画は入ってきた。それも沖縄本島や石垣よりも早くである。さらに昼もそれらの地域よりも与那国が先に入ってきたという。台湾帰りの女性は、言葉も仕草も着る服も与那国や石垣の人々と違って洗練されていたという。つまり、与那国の人々にとって台湾は先進地であり、他の沖縄の地域に比べて内地文化を享受できる地域であった。与那国は、沖縄のなかでも周辺にあり、蔑視されることがあったが、内地文化はそれらの地域よりも早く入ってきて、むしろ与那国が先を行っていたという。まさしく沖縄内での蔑視をはね返す資源として台湾があったのである。

それ故に植民地期と戦後直後を生きた人々と話をすると、台湾は文化的にも進み、与那国を豊かにしてくれた場所として語られる。密貿易の時代、如何に与那国が栄えたかと落々と語る者もいた。賑やかな飲み屋、映画館、子どもと一緒に荷物運びをするぐらい人手不足だった状況、様々なお金が飛び交う取引場所等の話である。台湾は与那国の繁栄を支え、台湾と時差も無く、台湾と与那国は同じ生活圏にあったと述べても過言ではない。

これらの話を身近に何度も聞いた人々が、当時を知らない戦後生まれの50歳前後の人たちである<sup>17</sup>。与那国の台湾との交流を強力に促進する人物がいる。彼は花蓮市の連絡事務所に半年いた人物であるが、彼もそのように話を繰り返して聞かされた者の一人である。彼は自らが台湾との交流が地域振興の突破口になると思ったのは、その体験話を聞いてからであると述べた<sup>18</sup>。まさに記憶が資源となり、その継承が台湾との交流の源となっている。

しかしながら、現在、台湾との交流が推進者の思惑通りにうまく進んでいる

<sup>17</sup> 30歳代の畜産農家にもインタビューを行ったが、50歳代の人ほどではなかった。

<sup>18</sup> ただし、台湾との交流はプラスの側面だけではない。台湾とのビジネスは難しく、そう簡単にもうけることはできないと、懐疑的な見方を示す体験者もいる。

かと言え、そうではない。その記憶の継承だが、現在うまくいっているとは思えない。特に現在、小中高校生などにとって、台湾の見方を変えるような形で伝わっていない。学校にも経験を継承してく制度的な場はない。したがって、全町あげて台湾との交流促進をという雰囲気は与那国にあるかと問われれば、筆者は自信をもってそれを肯定することはできない。むしろ、筆者のように研究者など外部者が注目している感がある。次節では、台湾側の反応も踏まえたうえで、記憶の継承以外の要因を明らかにする。

### 3. 交流を阻むもの

トランスナショナルリズムの研究を行う場合、跨がれている二つの地域で研究を行うことが不可欠である。だが、先島諸島と台湾東部との交流において、そのような視点から行われた研究は少なく<sup>19</sup>、日本側からの研究が中心であった。少なくとも現在の先島諸島の越境の試みについて、台湾側から見た研究はない。そこで交流を阻害する要因を探るにあたって、台湾側の事情についてまず見ていこう。

歴史的な経緯を簡単に述べれば、植民地時代は、又吉が指摘するように台湾の繁栄における労働不足がブル要因であった。さらに言えば、ここまで述べてきたように台湾は「先進地」であり、内地文化が享受できる場所であったことが、先島諸島の人々を台湾に引きつけた理由であったと考えることができる。終戦直後は、経済的要因が大きい。日本から台湾へは、米国製煙草、米軍用品、石油、弾薬等が密輸され、台湾から日本へは米、砂糖、モルヒネ、バナナ、サッカリン等が国境警備の目をかいくぐって運ばれた。これらの貿易は関係者に巨万の富をもたらした。日本復帰後は、姉妹都市締結の背景に見るように台湾の国際的地位の確保があった。

では、現在はどうかであろうか。与那国町の連絡事務所の設置を受け入れた花蓮市長は、その受け入れを国際交流の意義から語り、国際都市花蓮市をアピールするものであると捉えていた。実際、筆者が花蓮市役所を訪れた時にもマスコミ取材があったが、与那国町から派遣された人物は常に市長との同席が求められ、マスコミにも沖縄の与那国町から来た人物であると紹介されていた。こ

<sup>19</sup> 又吉の研究は台湾に目を向け、台湾での沖縄の人々について論じている(又吉 1990)。

れは筆者が訪問した時だけではなく。与那国町から派遣された人物は、取材の時はほぼ常に同席が求められたと語ってくれた<sup>20</sup>。

もうひとつの意義は、観光地としての与那国である。ある建設業者の社長は、与那国の海や民宿などが魅力になると語った。ただし、その場合は、あくまでも循環型のツアーとしてであった。与那国単独でのツアーは難しいという。そこに台湾資本が流入する余地はあるという<sup>21</sup>。

だが、一般市民レベルでは、芳しい反応を花蓮調査で得ることはできなかつた。投資先として与那国はメリットがあるとは実感していなかつた。ある花蓮市役所職員の反応は「与那国」に何があるのか、というものであつた。姉妹都市を結び、交流を促進する市役所で働く管理職でさえそうであつた。別の人物は、与那国は人口が少なく、投資先としては不十分であると考えていた。物を売りにしても1,700人に満たない人口では魅力が乏しいという。

また、観光面では循環型でも与那国に観光客が行く可能性は低いという。沖縄であれば、やはり沖縄本島や石垣に行くのであり、わざわざ与那国に追加料金をさらに出して行くだろうかというのが、彼の根本的な疑問であつた。

与那国の人々が花蓮市に行く意義は、花蓮市長の手法に見るように国際性の演出にある。だが、逆に花蓮の人間が行くとなると、一体どれほどのものであるのか、疑問がもたれるのが実際であつた。根本的に与那国のことを花蓮の人々は知らないのである。台北市内である花蓮県議会議員と話す機会があつたが、姉妹締結は知っていてもその先のことは知らなかつた。

また与那国で見られるように交流先との豊かな過去の経験について話を聞くことはなかつた。それはある意味当然であつた。与那国にとって台湾は内地文化がある土地であつたのであり、台湾にとって与那国は台湾の周囲にある地域でしかなかつた。その両者の交流も主には「日本人」とされる人々の間であ

<sup>20</sup> 彼の花蓮市滞在費は、一日の食事代程度であり、宿泊費を出すことができるような金額ではなかつた。自ら多くが手弁当であると語るように、彼個人の持ち出しが多かつた。与那国町も十分な予算措置ができる状況になく、このようななかで自治体が地域復興の施策を進めていることは、憂慮すべき事態であるとともに自助努力をする自治体にはもっと政府の支援が必要ではないかと痛感した。

<sup>21</sup> 筆者自身もその余地はあると考える。現在、台湾の日本ツアーは京都、東京(ディズニーランドを含む)、北海道などを巡る典型的なものと、主たる観光地以外を巡るより玄人好みのもとに分かれている。典型的なツアーを体験した人々が、後者のツアーを好んでおり、その市場に与那国が価値を見いだすことはあり得る。

り、台湾の人々と与那国の人々との間ではなかった。密貿易は台湾の人々と与那国の人々の関わりであるが、そのような話を見聞する機会は花蓮ではなかった<sup>22</sup>。花蓮と与那国では、両者の過去の交流においてその記憶の継承とその内容に大きな違いがある。

では、過去のように与那国から台湾東部に接近することで、与那国側にメリットをもたらし、交流の維持をはかることはできないだろうか。だが、現時点ではそれも難しい状況にある。その原因は主に4点指摘である。1点目は、同じ国内ではないという当たり前の理由である。現在、与那国町はチャーター便の就航や船の直行便の設置を働きかけているが、そのためには入管や税関が与那国に必要であり、さらには港が国際港としての資格を満たし、船が国際線の資格を満たしていなければならない。高コストである。一定の需要が必要だが、与那国と花蓮の間に限ってみれば、その需要はさほど高くはないと推定される。

2点目は言語の問題である。日本植民地期や終戦直後と異なって、現在、互いが用いる言語は異なっている。そのため十分な意思疎通ができない。花蓮市に駐在した人物が指摘するように交流促進のためには、与那国側において中国語に長けた人物を養成する必要があるが、しばらく時間がかかることは間違いない。

3点目は、商品を交換する状況にない点である。密貿易時代のように貧しくもなければ、互いに不足している物もない。1970年代にも密貿易を行った人物の言葉を借りれば、その理由は「食っていけない」であった。つまり、密貿易をしなければ生きていけない状況があったが、現在、そのような状況はない。

4点目は取引相手が存在しない点である。3点目で紹介した人物は、戦後直後も密貿易に従事しており、1970年代になっても取引可能な相手が存在した。密貿易の場合、信頼できる相手が必要であり、事前連絡が必要である。現在の与那国において、30歳代、40歳代、50歳代でそのような人物を台湾に持っている人を筆者自身は知らない。国境が強固になったことでそのような人的つながりという資源も失われた。

<sup>22</sup> 花蓮滞在は限られた時間であり、さらなる調査が必要である。

## おわりに

与那国において、「周辺」からの脱却とは構図としては植民地期と同じである。台湾と結びつくことで内地（日本本土）、沖縄本島を中心とした社会における「周辺」からの脱却をはかるというものである。それは、推進者の話を見るように根本的なアイデアが植民地期の交流や戦後直後の経験の流用から来ていることを考えれば、至極当然である。

しかし、現実には以前存在しなかった国境が存在し、そのため以前なら問題にならなかったことが問題となるようになった。ひとつは国家制度であり、入管などの出入国に関わるシステムである。もうひとつは人的問題である。言語の共通性、人的つながりなど、両地域の交渉を支えていたものが欠落している。植民地期、終戦直後の交流・交渉は同じ領土内であった、またはその遺産がまだ多く残っていた同一システムのなかで構築されたものであった。であるならば、記憶に基づく現在の与那国町の試みは同一システム上の経験を、国家と国家が異なり、異質なシステムなかへ移植しようとするものであると考えることができよう。そのため、昔、簡単にできたことが、今はできず、「国境があるから」となる。

さらに述べれば、同一システムでは個人が移動する基礎的環境はあるため、漁船ひとつで移動し、交流・交渉することが可能であった。移動するか否かは個人次第であり、コストを社会が考える必要がなかった。だが、現在はその個人の移動が可能となる基礎的環境を国民国家の枠組みのなかで整備しなければならない。その整備のためには一定程度の需要が必要である。現在、与那国ではコストの高い飛行機ではなく、コストの安い船の就航を試みているが、それでも一定程度の需要がなければ、船を持続的に走らせることも不可能であろう。さらに常時、出入国のシステムを整備するだけの需要がある。

そもそも与那国は人口が多いわけではなく、植民地期も現在も花蓮市の職員が語ったように人口規模から考えると魅力的な市場ではない。だが、以前の交流は漁船ひとつで往来できた。東へ移動するのではなく、個々が移動していた。したがって、両地域の往来は成り立っていた。

しかしながら、現在は漁船での移動は不可能である。東へ移動しなければならず、往来のコストが以前に比べて膨大になってしまわざるを得ない。同一

システムで構築されたものを異質な要素で成立しているシステムに移植するときに、見落とされているのはこの点である。主体の個人から集団（組織）への変化である。

したがって、大量輸送を必要としない方法こそが、今、与那国には求められており、そのためには漁船で移動できる環境が必要なのであり、そのための特区が必要である。しかし、同一システム上行っていたことを現在の異質システムに導入することは、国民国家の根本である国民と非国民を区別して出入国させるシステムの破壊を意味するだけに大きな困難を伴う。その点では与那国の試みは国民国家システムへの挑戦である。国外と国内を厳密に分け、国内の均質性を基礎とする国民国家は地域実情を無視せざるを得ない構造を根本的に有しており、その均質性の確保が地域の自立的発展を阻害する。それを与那国の事例に見ることができる。

石垣や与那国を調査していると、「南」にある（実際は西）台湾との交易が地域の起爆剤として考えている意見をたびたび聞くことがあった。だが、現実的には国民国家のシステム上、大量輸送を基本とするコストのため、以前のように自由に往来することはできず、交易が進んでいないのが事実である。そのなかで、結局、市場としては東北に存在する「北」の日本本土の人々へ目を向けざるを得なくなっていた。「北」からの客に如何に対応するかが重要であり、「南」は「北」の客の妨げにならないことが求められていた<sup>22</sup>。

筆者はそれを「希望の『南』と現実の『北』」と称した。台湾はこれらの地域にとっていつか経済的起爆剤となる希望の土地だが、優先されるのは日本本土である。その希望を支えているのは、過去から蓄積された台湾との交流の記憶であり、台湾の人々が身近に存在することであり、地理的接近性であることは間違いない。だが、その希望の現実化を妨げているのが、北からの移動を容易にしている国民国家である。先島諸島と台湾の交渉は、国民国家が内包せざるを得ない矛盾のなかに存在し、「希望の『南』と現実の『北』」という思考を生み出し続けている。

<sup>22</sup> 台湾の SARS 騒動の折には、台湾の客は石垣に上陸できなかった。

## 引用文献

- 黄智慧 (2000) 「南北源流交匯處：沖繩與那國島人群起源神話傳說的比較研究」『中央研究院民族學研究所集刊』89：207-235
- 上水流久彦・中村八重 (2007) 「東アジアの政治的变化にみる越境—台湾の韓国華僑にとっての中華民國」『広島県立大学論集』11-1 pp. 61~72
- 石原昌家 (1982) 『大密貿易の時代 占領初期沖繩の民衆生活』
- 又吉盛清 (1990) 『日本植民地下の台湾と沖繩』 沖繩あき書房
- 松田良孝 (2004) 『八重山の台湾人』 南山舎
- 三木健 (1996) 『沖繩・西表炭坑史』 日本経済評論社
- Nakamura Yae (2007) The Expression of Confucianism in Modern Medical Care in Korea, with a Focus on Organ Transplants in *Japanese Review of Cultural Anthropology* 8. pp. 53-76 Tokyo.
- 野入直美 (2000) 「石垣島の台湾人—生活史にみる民族関係の変容— (一)」『琉球大学法文学部紀要 人間科学』5 琉球大学法文学部
- (2001) 「石垣島の台湾人—生活史にみる民族関係の変容— (二)」『琉球大学法文学部紀要 人間科学』8 琉球大学法文学部
- 小熊誠 (1989) 「石垣島における台湾系移民の定着過程と民族的帰属意識の変化」『琉中歴史関係論文集』 琉中歴史関係国際学会議実行委員会
- 岡真理 (2008) 「沖繩本土復帰と沖繩在住台湾人—戦後沖繩・台湾関係の変遷を通じて (1945-1972)」 筑波大学大学院地域研究研究科修士論文
- 奥野修司 (2005) 『ナツコ 沖繩密貿易の女王』 文藝春秋
- 大浦太郎 (2002) 『密貿易島 わが再生の回想』 沖繩タイムス社
- 床呂郁哉 (1999) 『越境 スール—海城世界から』 岩波書店
- Watson, J. (1997) *Golden Arches East: McDonald's in East Asia*. Stanford: Stanford University Press.



なる影響を及ぼしたかについて考察してみた。親世代とは異なり、子世代の受けた学校教育はあくまでも一方的に中国寄りのものにほかならない。したがって、普段日本語を交えて会話したり日本への愛着を惜しみなく表現したりする親世代の姿は、子世代にとって不可解な部分が多く、現実社会から隔絶された哀れな存在に見えてしまう。とはいえ、そのような親の姿を通して子世代は往々にして学校で脳裏に叩き込まれた日本とは違う一面に気付くことになる。さらには、親の胸中に抱く日本の原風景を自らかたどっていくことさえあり得る。「多桑」の場合、日本を父親が代弁し、またその父親を子供が代弁しているという仕組みが用いられる。その中において道理を諄々と説き諭すような能弁者はだれ一人いなくても、それぞれ代弁する過程を通して、日本の表象の捉え方について何かが親子の間に共有されていると読み取ることができよう。

ところが、本稿で取り上げた「日本語人」世代の言説から「日本精神」を深く感得できるか否かは受けた教育程度や従軍経験にかかっているとニュアンスが所々にほのめかされている。つまり、「日本精神」は必ずしも台湾の同世代全体に共有されているものではないという興味深い問題が残っている。冒頭においても少し触れたが、そもそも「日本精神」とは「精神的血液」と称され、統治者側が同化の名目をもって差別を徹底化させるためのメカニズムの一環に組み込まれていた。それが被統治者側をさらに重層的に階級づけることにも加担していた側面がここまでの検討過程の中で浮上してきたが、頁数の制限から次稿の課題としたい。最後に、本研究は日本科学研究費補助金(17720075)の助成を受けたことを付記しておく。

世新日本語文研究  
2009年4月・頁21-37

## 由台灣東部和沖繩先島群島所見的跨境現象 ～以與那國島為中心

上水流久彦\*

### 摘要

在二次大戰前沖繩的與那國島和台灣一樣是處於和日本一樣國內的地位。雖然在大戰結束之後的混亂時代中也有國界，但卻也還是能夠自由地移動於兩國之間。而後，兩國之間的國界逐漸強化。近幾年，由於與那國島的人口持續減少當中，便開始摸索和台灣之間的交流或交易，做為振興地方的辦法。兩國交流中則有過去兩國之間來往的經驗背景。但是，這樣的嘗試交流可以說，是把兩國在無國界時代的關係，重現於當前有國界時代的一種交流。也就是說想要超越所謂民族國家的框架。結果因此產生許多問題。嚴格地劃分國外和國內，而以國內的等質性做為基礎的民族國家，根本地擁有不得不忽視地方實際情形的結構，但為了確保民族國家的等質性，反而成為地方自主發展的阻礙。

關鍵字：跨境、與那國島、台灣東部、民族國家、振興地方、後殖民主義

\* 國立廣島大學地域連携中心助理教授